

# 全国



協力を誓い合

「ピーマイ・ハーティ12018」を東京都内で開く。ラオス料理のピユッフエ、参加者がお互いの手首に糸を巻き付け合って健康

大學生二千五百円、小学生千五百円、小学生千円。収益はラオスでの教育支援活動に充てられる。申し込みは同法人へ電話(3755)1603へ。

## 補聴器補う「会話器」開発

難聴の人が日常会話や会議、講義の聴講を円滑にできるようにする「会話器」を横浜市神奈川区のベンチャー企業「Jumpers」(ジャンパーズ)が開発した。従来の補聴器が周囲の雑音も増幅するのに対し、機器を持った人の声だけが届くようになっていく。(志村彰太)

### 雑音カット 声を増幅

会話器は、声を無線で送る「フェース・トーカー」(縦九センチ×横七センチ×厚さ一センチ、九万二千八百円)と、有線タイプの「対話くん」(縦五センチ×横五センチ×厚さ一・五センチ、一万二千六百円)の二種類。フェース・トーカーは会議や講義で、対話くんは一対一の会話で使う。西尾俊広社長(左)に実演してもらつと、声が鮮明に聞こえ、遠くに離れても耳元で会話しているようだった。また高額なため、行政の相談窓口、障害者雇用を進める企業の会議、大学

#### 横浜のベンチャー企業



フェース・トーカーを手にする西尾俊広さん。壁に掛かっているのは首掛けタイプの会話器＝横浜市神奈川区で

の講義などでの使用を想定する。西尾さんは起業前、日本ビクターで「難聴者のための

かなり、独立した。起業後、難聴について調べると「雑音が多い環境での会話など、補聴器でカバーできない部分がある」と知った。雑音をカットして声を増幅できないか考え、話者にマイクを付けて無線や有線で声を送る「会話器」の着想を得た。一三年に首掛けタイプを発売し、介護施設や学校で試してもらった。「首が疲れる」「首元が目立って恥ずかしい」といった改善要望を受けて昨年十一月、胸ポケットに入るフェース・トーカーと、手のひらサイズの対話くんを開発。首掛けタイプと合わせ、これまでに大学や病院など四十カ所に販売した。

横浜市旭区は昨年十一月から、対話くんを窓口で使用。介護保険の受給相談などで訪れるお年寄りも多く、新井隆哲・区高齢障害支援課長は「プライバシーに関わる相談だと大声で対応できず、以前は筆談や身振りを受けていた。職員や来庁者から『相談しやすくなった』という感想が寄せられた」と評価する。課題は価格と大きさ。小型化と量産化で値下げを目指すという西尾さん。「誰もが普通に会話を楽しめる社会にしたい」と強調した。

## メトロポリタン



### 首都圏日誌

「紙面にかこの写真が掲載され、うれしくて来ました」。笑顔の男性が支局を訪ねてきてくれました。群馬版では「表彰おめでとう」の欄で各種コンテス

#### 前橋支局から

トの入賞者名などを紹介。男性は前橋市民展で「花かご(ひし形折り返し編み)」が東京新聞賞に輝いた千木良充さんでした。千木良さんは一九六七年

に一年間、当支局で編集補助の仕事をしてきたそうでした。驚きました。半世紀を経て本紙の賞に喜ぶ先輩。「ご縁ですね」とこちらも笑顔になりました。(竹)

2018・4・11

ご意見募集  
FAX 03(3595)7085  
Eメール syutoken@tokyo-np.co.jp